

知ってる?

播磨の川のこと

兵庫県では「治水・利水」「生態系」「水文化・景観」「親水」を4つの柱として、人と自然が共生する川づくりをすすめています。



加古川

加古川大堰

マップ番号 E-4

治水・利水 親水

JR神戸駅近くにある加古川大堰は、洪水を安全に流すため、また、水道水や工業用水等の需要へ対応するため、そして、下流部に必要な水量を流すために、昭和55年度から建設に着手し、昭和63年度に完成した堰です。

加古川大堰では、ふだんは水道水、工業用水、農業用水として使用される水を確保しつつ下流に必要な水を放流するための操作を、大雨時には洪水を安全に流すための操作を実施しています。

また、大堰を挟んだ兩岸の魚道には、春から初夏にかけて稚アユを見ることが出来ます。大堰上流では水面を利用してしガッタの大会等の各種行事が行われているほか、左岸にある大堰の事務所南側には「大堰記念公園」があり、加古川の流れを望む憩いの空間となっています。

揖保川

水害から町を守る畳堤

たたみてい

マップ番号 C-4

揖保川の畳堤は、橋の欄干のような形をした格子状の堤防のことで、洪水時に水位が上がったときに、堤防のコンクリートに掘られた溝に畳を差し込んで水があふれるのを防ぎます。

この畳堤は、昭和20年代に「揖保川の水の流れ、自然の風景が見える堤防にしたい」と市民から要望が上がった。行政と住民との話し合いの結果つくられました。

揖保川下流地域は、川に近接して民家や道路がつくられているため、土を盛って堤防をつくるための用地がありませんでした。そこで、少ない用地の中に、コンクリートの支柱を等間隔に立ち上げて畳をはめ込む方式になったのです。一見、橋の欄干のように見えるデザインであるため、周囲の様子ともうまく調和しています。

揖保川

取水の歴史を示す様石

のりいし

治水・利水

農業用水を確保するために、水をせき止める「井堰」がつけられました。井堰は高すぎると水が流れず、下流の地域に水が行き渡りません。低すぎると田んぼに水を送ることができません。そのため、昔の人は水をめぐめる争いが起こらないように、井堰の高さの基準として様石を設置したのです。

揖保川では、たつの市の旭橋近くに当時の様石が残っています。

千種川

ハマウツボの保全

生態系

赤穂市高雄地区の千種川河川敷には、絶滅危惧種であるハマウツボが生息しています。平成16年(2004年)から、地元・県・市などで構成される高雄地区水辺づくり協議会を設置し、千種川河川敷を自然豊かなで活用しやすい場所にするため、多目的広場や遊歩道を設置するとともに、ハマウツボの保全エリアの創出に取り組みました。地域主導で草刈りなどの維持管理活動が継続され、自然観察会等の活動も毎年実施されています。



▲ハマウツボ

▲河川敷の清掃

安室川

チスジノリの保全

生態系

絶滅危惧種であるチスジノリはきれいな水質の川に育つ藻の一種です。兵庫県では上郡町の安室川にだけ生息しています。安室川では、一時期チスジノリが見られなくなり、絶滅が心配されましたが、平成16年(2004年)の調査で9年ぶりに発見されました。現在は、地元の中学校などがチスジノリの完全復活を目指して川の環境づくりに取り組んでいます。生息環境を取り戻すために、川底をきれいにし、瀬・淵・湧き水を再生する、中洲を湿地化して魚道を設ける等の取り組みを実施しています。



▲チスジノリ

▲地域住民による川を新す活動

揖保川における魚道設置

生態系

揖保川では古くから農業を中心とした水利用がされており、そのため堰や樋門が多くあります。中には、魚などの移動の妨げになっているものもあるため、魚道の設置、改良等を行い、生物移動の連続性を回復させる取り組みを行っています。

他の河川においても、生物が移動しやすいように魚道設置等の工夫を行っています。



▲魚道の設置(与位樋)

注目種

～生きものを大切にしよう～

生態系

川には、さまざまな注目種(絶滅の恐れがあるなど、今後の保全が必要な種)が生息しています。その多くは、かつては普通に見られたものですが、河川改修による生息場所の減少や、外来種の影響などにより、絶滅の恐れがある種になってしまいました。兵庫県では、そのような種に配慮した川づくりをしています。

みなさんも川で注目種を見つけたときは、大切に扱きましょう。もちろん、これらの生きものに限らず、川に生息するさまざまな生きものを大切に扱きましょう。ここでは、一級河川の揖保川、加古川、二級河川の市川、夢前川、千種川に生息している注目種を紹介します。

揖保川



▲オヤコラミ(上流)

▲カジカガエル

▲ヤマセミ

▲ゴジバハマ

市川



▲アオサナエ(中流)

▲モリアオガエル

▲ゲンジボタル(上流)

▲メダカ(中下流)

千種川



▲タコアナシ(中流)

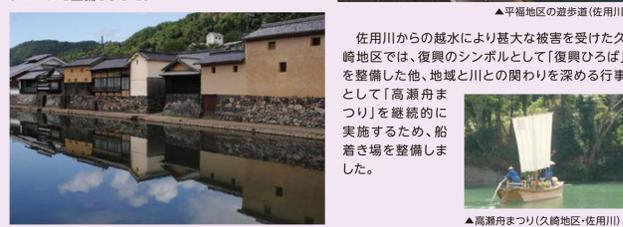
▲アンバインボ(下流)

千種川

平成21年災害からの復興

水文化・景観

平成21年8月の台風第9号により、最大24時間雨量326mm、1時間雨量81mmの激しい雨が降りました。千種川水系では大規模な河川氾濫等が発生し、死者・行方不明者20人、床上浸水261世帯、床下浸水1,176世帯に上る大きな被害を受けました。これを受け、災害からの復旧・復興工事を行いました。事業対象区間には、宿場町として有名な佐用町平福地区があり、歴史的景観と調和するよう配慮した遊歩道を整備しました。また、佐用地区や久崎地区では、地域交流や健康増進を図るとともに、災害文化の継承を目的としてウォーキングコースを整備しました。



▲平福地区の遊歩道(佐用川)

佐用川からの越水により甚大な被害を受けた久崎地区では、復興のシンボルとして「復興ひろば」を整備した他、地域と川との関わりを深める行事として「高瀬舟まつり」を継続的に実施するため、船着き場を整備しました。



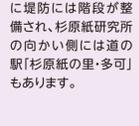
▲高瀬舟まつり(久崎地区・佐用川)

杉原川

杉原川と和紙づくり

水文化・景観

多可町北部にある「杉原紙研究所」では、1300年の歴史と伝統を持つ和紙「杉原紙」がつくられています。杉原紙研究所の前を流れる杉原川では、1月中旬～3月下旬にかけて、杉原紙の原料となる楮を川に打ち付ける「楮の川さらし」が行われます。川に降りやすいように堤防には階段が整備され、杉原紙研究所の向かい側には道の駅「杉原紙の里・多可」もあります。



▲楮の川さらし



▲杉原川の親水護岸

千種川・揖保川

清流千種川・揖保川が育む牡蠣

赤穂、相生などは牡蠣が有名ですが、おいしい牡蠣が育つのは清流千種川・揖保川から多くの植物性プランクトンとミネラルが瀬戸内海・播磨灘に流れこむためなのです。牡蠣はエサとなるプランクトンが豊富でないと、身が詰まった大きな牡蠣にはなりません。

播磨灘は、海岸まで迫った入り組んだ地形が冬の季節風をやりわらせ、千種川や揖保川から流れてくる豊富な栄養素が成長を後押しすることで、牡蠣の養殖に絶好の場所となっています。ただし、牡蠣の排出物により漁場が劣化するおそれがあるため、密になりすぎないようにイカダを配置し、生産期が終わるとイカダを移動して海底にたまったものを掃除する、という管理が必要です。

千種川・揖保川からの自然の恵みに頼るだけでなく、牡蠣が育つ環境を守るための生産者の努力が、「播磨の牡蠣」を育てています。



▲播磨の牡蠣



▲養殖イカダ



▲牡蠣の収穫

市川

姫路革の伝統的技法

市川の水流に牛の原皮(剥いだ状態の皮で毛はついていないもの)を浸して脱毛し、塩と菜種油を用いてもみあげて、天日干しをした革は「姫路革」と呼ばれています。しなやかでありながら強靱で、昔から武具、馬具、装飾品などに使われてきました。姫路革は、わが国に古くから伝わる代表的な皮革で、その産地である姫路市花田町高木は、わが国の皮革産業の発祥の地といわれています。姫路革をつくる工程の中で、特に市川の流れと関係があるのが、川揚げです。川揚げがうまくできるのは、播磨では市川の高木付近だけで、ゆるやかな流れと、浅すぎず深すぎない水量のある場所に限られているといわれています。



(姫路市提供)

加古川

加古川の舟運と闘竜灘

マップ番号 E-3

加古川の舟運は、1500年代後半の豊臣秀吉の時代に、政治や経済の中心が京都から大阪に移動したため、播磨の年貢米を運ぶルートもそれに伴い変わり、発展しました。舟波市本郷から滝野・新町を経て高砂まで舟の往来がありました。闘竜灘は船が通過できないため、滝野は大型船から小型船へ、船荷の積み替えを行う重要な地点となりました。加古川の舟運は大正2年に播州鉄道(現JR加古川線)ができるまで、人や物資の連続性を確保する重要な役割を果たしていました。



▲加古川の舟運

▲舟の行く手を阻む闘竜灘

加古川

聖徳太子と太子岩

マップ番号 E-4

「太子岩」は、加古川大堰下流、加古川本流と華谷川の合流部にある岩です。飛鳥時代、聖徳太子が加古川東岸のかんがいが用水路工事の際、基準にした岩だと見られています。

現在では、「太子岩」の大半は土砂に埋まり、その一部しか見ることができませんが、かつては目の淵でアユやウナギなど、さまざまな魚が捕れたそうです。



▲わずかに頂上部が出た「太子岩」

市川

銀の馬車道

市川の筋筋は、山陰・山嶺をつなぐ交通路で、古くから但馬街道として利用されていました。山嶺との接点には、生野銀山が史跡として残っています。明治初頭、生野銀山から飾磨港に至る市川沿いに、日本初の高速産業道路「銀の馬車道」が建設され、南北物流の基盤となりました。神戸町吉富地区には、「銀の馬車道」の一部が現存し、今も生活道路として利用されています。

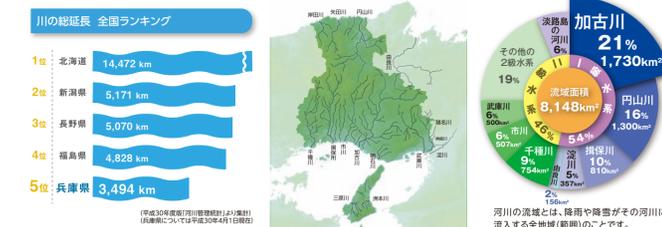


▲現存する銀の馬車道(写真出典元:神戸市)



兵庫県の川

●日本の川と兵庫県の川 日本には、2,820水系、約21,000の河川があります。そのうち、兵庫県には97水系、685の河川があります。総延長は、全国5位の3,494km にのびています。



●兵庫県の川の特徴

兵庫県は、約8割が山地で、中央部からやや北よりを中国山地が東西に走り、県土を南北に二分しています。そのため、日本海へ注ぐ川と瀬戸内海へ注ぐ川があります。一方、明石海峡を隔てた淡路島では、南北に山地が走り、東西方向に川が流れています。日本海側と瀬戸内海側では気候が異なり、広い県土にはいろいろな地形が広がっていて、川の特徴もさまざまです。

ダムカードを集めてみよう

ダムのことをより知っていただくために、ダムカードを配布しています。ダムカードには、ダムの大きさ、高さに加え、豆知識や、工事の際に工夫したことなどの情報を記載しています。配布場所は、市役所、県土木事務所や、現地のダム管理所などです。詳しくは県HPへ https://web.pref.hyogo.lg.jp/ks12/wd16_00000067.html ※兵庫県土木整備部管理ダムのみ QRコードはこちら



川に入ってみよう

●生きものを探すポイント

探す場所 見つけるコツ
魚類: 水際の植物の間、石と石の間や岩陰、水中メダネや箱メガネの中を見る
底生動物: 小石の裏やすき間、水際の植物の間や砂の中や落葉、箱メガネの中を見る、網目の小さいタモ網で探す

●準備するもの

気をつけること
●川に一人でやってはいけません。
●行き先を家族に伝えておきましょう。
●川の水量や水深に注意しましょう。増水していれば中止しましょう。
●暑い日には帽子を被り、日射病に注意しましょう。また、水分補給をしましょう。
●深いところや、流れの速いところに入るとはいけません。
●河底や石の上は滑りやすいので気をつけましょう。
●毒のある動植物に注意しましょう。
●ダムの放流の注意サイレンが聞こえたらすぐに高いところへ避難しましょう。
●夕立が降ったら中止しましょう。急に増水することがあり、危険です。
●水面が平らでも川底が急に深くなる場所があるので注意しましょう。

●川を利用するときのマナーとアドプト

ごみは持ち帰り、いつでもきれいな川を保つことができますようにしましょう。兵庫県では、県が管理する河川において、みなさんがボランティア等(清掃美化活動)を行う際に、県・市町が用具の提供等を行い支援する制度「ひょうごアドプト」があります。さまざまな人の活動によって、兵庫県の川はきれいに守られています。

防災情報の入手

豊かな風景を生み出す川も、大雨の時には非常に危険です。平常時も洪水時も防災情報を確認しておきましょう。
兵庫県CGハザードマップ: http://www.hazardmap.pref.hyogo.jp
ひょうご防災ネット: https://bosai.net/
河川監視システム: http://hyogo.rivercam.info/index.html
フェニックス防災システム: http://hyogo.bosaiinfo.jp/mobile/
増水警戒情報: 河川内に観水施設を有し、急激に水位上昇が見込まれる20河川118箇所に大雨・洪水注意報/警報の発表と連動して作動する回転灯を設置し、河川利用者への注意喚起を図っています。
増水警戒情報の提供河川: 表六甲河川(13河川)、新赤川・石井川・天井川・新法寺川(神戸市)・東川・原川(西宮市)・芦屋川(芦屋市)
その他の河川(7河川): 有馬川・福田川・山田川(神戸市)・天神川(宝塚市)・天王寺川・駄六川(伊丹市)・朝霧川(明石市)